

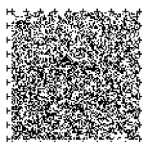
## 藤牧 義夫の作品について



ガイドスタッフT

素朴で可愛らしい雰囲気も漂う小さな版画たち。これらは24歳で消息を断った藤牧義夫がわずか5年余りの版画家としての本格的な活動期間中に発表した作品です。16歳で上京し働きながら独学で身につけた技法で、関東大震災からたくましく復興してゆく東京のさまざまな風景を、藤牧はどんな思いで彫り進めたのでしょうか。私には、ところどころに大きく配された余白がきらめいた光のようにも見えます。当時の藤牧にとっても、これらの近代的な都市風景は自身の明るい未来を照らす希望の光に見えていたのかもしれませんが。

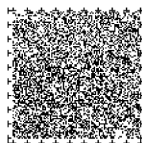
音声コード  
Uni-Voice



## 朝倉 摂について

東京・谷中出身の朝倉摂。その生家は現在、朝倉彫塑館（台東区）として公開されています。日本画家を志し、偉大な彫刻家である父のもとから自立するため、27歳で独立。画家として活動していたのは主に1940～60年代の30年間ですが、現代社会への関心が高く、50年代には漁村・炭鉱・工場などへスケッチ旅行に出かけ、戦後日本を支えた労働者をたくさん描いています。ひとりの若い画家として、当時の日本の現実に向き合っていました。その後、舞台美術家に転身しますが、時代や物事の本質をとらえるため、写生は毎日続けていたそうです。

音声コード  
Uni-Voice



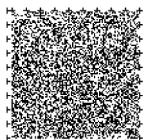
ガイドスタッフ M

## 光島貴之 《手ざわりの冒険》 2019

美術館で「作品に触っていいよ」と言われたことはありますか？ 打ってあるピンの美しさを感じる作品ですが、是非触ってみて下さい。目を閉じてもいいですね。

触れているところに気持ちを集中させると、それまで感じなかったことに気づきませんか。美術作品は「見る」以外の方法でも味わえるんですよ。ずっと触っていたい質感だったり、思った以上にデコボコが気になったり。次々に変わる肌触りを楽しみながら一緒に冒険をしましょう！

音声コード  
Uni-Voice



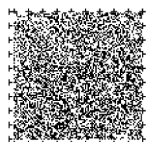
ガイドスタッフH

## 石川直樹 《NEW DIMENSION》について

先史時代の壁画をめぐる写真集のシリーズ「NEW DIMENSION」から、南米パタゴニア地方の渓谷にある「手の洞窟」に至る2点の作品です。

おびただしい手型は、ネガティブハンドと呼ばれ、骨をストローのように用い顔料を吹き付けたと考えられています。それは光に感応させ像を映しとる「写真の原型」であり、いつか撮りたいと思いつけた場所だったとか。写真家であり、冒険家である石川は、極地であれどこであれ、出会いがしらの心の反応で何も考えずに撮ると語っていますが、そこには時を経てなお変わらない風景や人の叡智、営みが映し出されています。

音声コード  
Uni-Voice

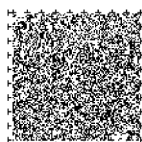


ガイドスタッフ K

## リチャード・ロング 《STICKS》 1976

イギリスの作家であるリチャード・ロングは、自然のなかに大きな痕跡を残さずに、天然の素材を使って作品を制作します。また多くの作品は「歩く」という行動をもとにして作られています。小枝の曲線や、美しいジグザグの並びなど、一つひとつの造形やその集合体はミニマリストの彫刻のようにも見えます。小枝の列の間には森の小径のような空間が続いています。完全な自然ではないけれど、自然とアーティストが会話をしながら作られたような不思議な空間のように思えます。

音声コード  
Uni-Voice



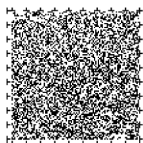
ガイドスタッフ N

栗田 宏一

《POYA DAY —満月の日の小石拾い 108 夜》 1991-99

ポヤ・デーとは満月の日にお寺で祈る、スリランカの祝日です。作家は若い頃、月の引力を感じるために毎月満月の日に浜辺に立ち続けました。徐々に水位が上がり、やがて体がすっぽりと海水に覆われる…。満月の日は満潮と干潮の差が2m近くにもなるそうです。この作品ではそれが石を拾うという行為に代わっています。小石の数が煩惱と同じ、108 個になるように制作されましたが、実は今も小石拾いは続いているそうです。美術館を出たら、ぜひあなたも足元の石に目を落としてみてください。いままで見えなかった何かが見えてくるかもしれません。

音声コード  
Uni-Voice



ガイドスタッフ F



## サム・フランシス 作品全体

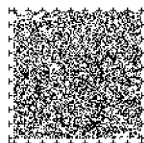


ガイドスタッフT

見渡すと、いつの間にかトビウオになった気がしました。光に反射し多彩に輝く水面をぴょんっと跳ねて、上に、前に。なんて気持ちがいいんでしょう！縦長の5つの作品は、光をいっぱい浴びてプクプクと光合成をしている大きな海藻のようにも思えてきます。海藻の周囲の色の塊は魚でしょうか？

大胆な余白と鮮やかな形状の力強い組合せに始めは圧倒されますが、眺めるにつれ形状はみずみずしく、その周りに溢れる細かな飛沫や線は、見るものを優しく包むようにいざないます。貴方もこの海に身を委ね、不思議で自由な世界を体感してみませんか？

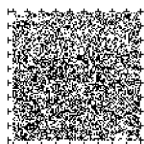
音声コード  
Uni-Voice



## ジェニファー・バートレットの作品について

真っ暗な所で、鳥の卵にライトを当てると、そこで生命が育っているのを確かめる事ができるのを御存知でしょうか。殻に透ける血管。ジェニファー・バートレットの描く卵にはその中に息づく生命が見えるようです。翼を持つ生き物は、私達人間が持つ事の叶わない目線で自由に空間を生きています。が、必ずその生命にも終わりは来る。左側の燃えて落下したような鳥は炎の色に包まれています。でも、燃え尽きた自らの灰の中から蘇るとされる伝説の不死鳥・フェニックスの名は、この鳥の名から取られていることを知ると、全体が一つの作品に見えてきます。

音声コード  
Uni-Voice



ガイドスタッフ Y



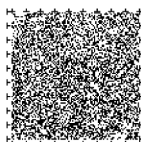


宮島達男 《それは変化し続ける それはあらゆる  
ものとの関係をつぶす それは永遠に続く》 1998

しばらく眺めてみましょう。1から9までの赤く  
点滅する数字が、それぞれ違う速度で繰り返し動いて  
います。0はありません。

ここから何をイメージしますか？ 生と死、人生、  
人間社会、あるいは宇宙でしょうか。LED デジタル  
カウンターを使ったシンプルな数字だからこそ、  
感じ方はさまざま。想像が広がるのかもしれませんが。  
この作品の長いタイトルは、作家が大切にしている考え方  
そのものです。「それ」とは何でしょう。あなたなら  
「それ」をどんな言葉に置き換えたいですか？ 広い  
この空間に包まれながら、時間を忘れて考えて  
みませんか。

音声コード  
Uni-Voice



ガイドスタッフ N



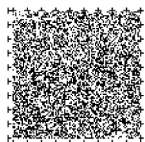
## アンソニー・カロ 《シー・チェンジ》 1970

「鉄」といえば硬く重い工業用の材料をイメージする方が多いでしょう。1959年アメリカで見た抽象彫刻に刺激を受け、カロは鉄に赤や黄などの鮮やかな彩色を施し、台座を取り払い、軽やかで自由な形を生み出しました。新しい鉄の彫刻の誕生です。海の変化を表すタイトルの通り、明るいブルーグリーンの海、刻々と変化し、足元に打ち寄せる柔らかな波、穏やかな波の音が聞こえてきそうな感じがしませんか。お帰りの際には1階展示室入り口から外を眺めて下さい。カロの《発見の塔》が見えます。開館時からずっとここで私たちを楽しませてくれています。

みなさんは何を感じられますか？

音声コード

Uni-Voice



ガイドスタッフ T



アルナルド・ポモドーロ

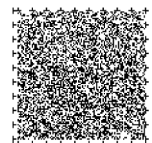
《太陽のジャイロスコープ》 1988



ガイドスタッフI

ジャイロスコープは船や飛行機の針路を定める時に使われる道具です。絶対の安定性と信頼性が求められます。作品を見てみましょう。とても力強く、合理性を感じます。でも気付きましたか。そこにある鋭い裂け目に。作者のポモドーロによれば、この裂け目は深層意識を表現しているのだそうです。合理性と深層意識が共存しています。この作品を見ると私は自分の人生を思います。岐路に立ち人生の針路を定める時には合理的な判断を心がけ、人生を送ってきたように思うのですが、そうでなかったこともあるなど。それは、それでよかったなど。

音声コード  
Uni-Voice



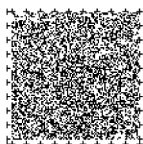
オノ・ヨーコ

《インストラクション・ペインティング》について

真っ白な余白のあるキャンバスに言葉がひとつずつ描かれています。鑑賞するには少し仰ぎ見る必要があります。切り取られたひとつひとつの言葉は、日常の会話で使われる時とは、異なるものにも思えてくるかもしれません。誰にでも開かれているようで、それは「私」だけのために向けられた言葉のようにも感じます。一つの言葉に惹かれましたか？横に並んでいる言葉と結び付けて、あなただけの詩を紡いでみましたか？

このような形式のアートはインストラクション（指示）と呼ばれますが、この作品はむしろ、私たちの心を自由に解き放ってくれるようです。

音声コード  
Uni-Voice



ガイドスタッフ N

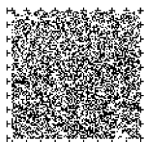


## トミエ・オオタケ（大竹富江）《Untitled》 2008

ゆるやかに、のびやかに、自由に進む白い曲線。「見る人の感じ方を大切にしたい」と作品に題はつけなかったそうですが、あなたはどんなイメージをもちましたか？オオタケは1913年京都で生まれ、ブラジルへ移住。独学で絵を描き始め、幾何学的な抽象絵画や彫刻を制作し、2015年に101歳で亡くなるまでブラジルを代表する作家として活躍しました。

大正生まれのハイカラ女性が遥かブラジルで好きな道を極めて成功を修める、なんて素晴らしいのでしょうか！その精神が作品にも表れていると思いませんか。

音声コード  
Uni-Voice



ガイドスタッフ T



鈴木昭男

《道草のすすめ - 「点音（おとだて）」 and "nozo mi"》

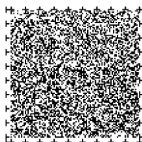
2018-19

《点音》は美術館内と敷地内に点在する12個の白くて丸いプレート。《no zo mi》は屋外展示場にある5つの階段状のもの。足とも耳とも見えるマークが目印。見つけたらたぶん乗ってみたいくなる、そんな作品です。美術館で作品に乗っていいの？ そう思われるかもしれませんが、子どもの頃、駐車場の車止めブロックのような地面から少し高いところについ上ってみたいくなりませんでしたか？ そんな気持ちのまま、ぜひ《点音》に乗って、耳を澄ましてみてください。

12の《点音》の場所の地図もご用意しています。

手に入れて探検開始です！

音声コード  
Uni-Voice



ガイドスタッフ Y

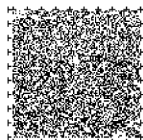


## 文谷有佳里 「ライブドローイングについて」

美術館のガラス面がここだけ華やか！ 2019年7月24日の公開制作で、仕上がって行く様子をお客様が直接見られるライブドローイング。一発勝負です！

黒くのびやかな線は作家の想いを乗せて高い所まで続きます。時には『そのペン書きやすいよね』などとお声もかかり、お客様との会話を楽しみながら和やかに。作品制作を通じて人とのつながりを大切にしています。私も挑戦したくなります。建築家が図面を描く様に、音楽家が作曲をする様に、描かれた作品からリズムカルなメロディーが聞こえて来るでしょう。コレクション展の入口にふさわしい作品です。

音声コード  
Uni-Voice



ガイドスタッフ 〇